

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870359

研究課題名(和文)越境するパリ・モード 近代デザイン運動からみたポール・ポワレ

研究課題名(英文)Paris Fashion beyond the boundaries: Paul Poiret in the context of modern design movement

研究代表者

朝倉 三枝 (Asakura, Mie)

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：90508714

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初頭のパリで活躍したクチュリエのポール・ポワレが衣服にとどまらず生活空間全体に及ぶデザイン活動を展開し、同時代のデザイン教育や美術展においても重要な役割を果たしていたことを明らかにすることで、新たなポワレ像を提示した。また、漆作家のジャン・デュナンや画家のラウル・デュファイ、藤田嗣治が行ったファッションの仕事に注目することで、ジャンルの越境を可能とした20世紀初頭のパリ・モードの重層性と多様性を浮かび上がらせた。

研究成果の概要(英文)：Paul Poiret, the couturier who played an active part in Paris in the early 20th century, developed the wide design activities which reach not only clothes but also living space. I clarified his considerable influence on the French design movement of the same period, and showed a new image of Poiret, no merely "fashion designer". In addition, I paid attention to the fashion works done by a lacquer artist Jean Dunand and two painters Raoul Dufy, Tsuguharu Foujita, and I pointed out the diversity and profundity of Paris Fashion in the early twentieth century, which allowed crossing the border among the different genres.

研究分野：人文学

キーワード：近代デザイン運動 ポール・ポワレ パリ・モード 装飾芸術 アール・デコ

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、大学院在籍時より、「モードと芸術の交流」という観点から、フランスで活躍した女性画家ソニア・ドロネーが1910-20年代に行った衣服制作について研究を進めてきた。2008年にそれまでの成果を博士論文にまとめ、2010年に著書『ソニア・ドロネー 服飾芸術の誕生』(ブリュッケ)を出版した。この研究で、研究代表者はドロネー自身が「服飾芸術」と呼んでいた衣服制作が、絵画をはじめ、文学、舞踊、映画、室内装飾など、諸芸術と結びつきながら展開されていく過程を分析した。そして、ドロネーが参加した1924年のサロン・ドートンヌ(秋季美術展)と1925年の現代産業装飾芸術国際博覧会(通称アール・デコ展)の展示を調査する中、クチュリエ(ファッション・デザイナー)のポール・ポワレがそこで衣服制作にとどまらない実験的な展示を行っていたことを知ることとなった。そのことが、クチュリエと装飾芸術の関係性という新たなテーマに関心を向けるきっかけとなった。

(2) 先行研究においては、1990年前後から「装飾芸術」という観点に立ち、近代以降の美術史や美術批評の読み直しを行う研究が国内外で進められるようになり、その中で、装飾芸術とクチュリエの関係性を問う研究が登場した。その先駆として知られるのが、ナンシー・トロイの研究である。2002年に発表された *Couture Culture: A Study in Modern Art and Fashion* (The MIT Press) で、トロイはクチュリエのポール・ポワレに焦点を当て、モードがその当時の芸術と同じように、オリジナルとコピーの問題をはらんでいたことを指摘した。同研究は、それまでモードという文脈の中でしか語られてこなかったポワレが、おそらく初めて芸術というコンテキストに引き込まれ評価されたという点で重要である。しかし、トロイが扱った時代は、ポワレの活動期間の半分にあたる第一次世界大戦勃発までであった。また、日本においては天野知香が『装飾/芸術』(2001年、ブリュッケ)において、19-20世紀転換期のフランスにおける「装飾」の概念を、さまざまな芸術運動と社会的コンテキストの中で捉え直したが、モードに関する議論がそこで十分になされたというわけではなかった。

(3) 一方、2007年にニューヨークのメトロポリタン美術館、2011年にモスクワのクレムリン美術館でポワレの大規模な回顧展が開催されたように、近年、ポワレ再評価の動きがみられる。ただし、これらの展覧会は2005年にパリで行われたポワレの競売で各美術館が新たに所蔵することとなった衣服を紹介することが主たる目的であり、その意味でポワレの評価は未だその衣服制作と結び付

けられていると言える。このような研究動向を鑑みつつ、研究代表者はクチュリエという肩書にとらわれず、分野の枠を乗り越え、活躍をしたポワレの創作活動を、装飾芸術という文脈から新たに捉え直したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀初頭にパリのモード界を牽引していたクチュリエのポール・ポワレに注目し、衣服にとどまらず、生活空間にまで及んだその幅広い創作活動を、近代デザイン運動という文脈から捉え直すものである。

おりしも20世紀初頭のフランスでは、パリ・モードの黄金期が築かれており、そこで活躍したクチュリエが国内外に及ぼした影響は計り知れない。一方、この時代はフランスの近隣諸国でも、前衛的な芸術運動が次々に台頭し、衣食住を「総合芸術」という観点から捉え、トータルでデザインするという試みが行われるようになっていた。そうした時代にあって、ポワレは具体的にどのように同時代のデザイン運動と関わり、その進展に貢献したのか。このような問題意識から、本研究ではこれまでむしろその衣服制作ばかりが注目されてきたポワレが果たした役割を、同時代の装飾芸術との関わりから論じること、従来の服飾史、美術史、デザイン史などといった個別のディシプリンに閉ざされた方法からは見えなかった新しいポワレ像を提示し、学問領域の枠組みにとらわれない学際研究の重要性を示すことを目指した。

3. 研究の方法

(1) ポワレが服飾以外の分野に進出するきっかけをもたらしたウィーン工房に関する調査をオーストリア(応用美術博物館、ウィーン・ミュージアム・カールス・プラッツ、セセッション)とフランス(国立図書館、装飾美術館、ガリエラ美術館)で行い、ポワレとの交流や両者の影響関係について考察を行う。

(2) 20世紀初頭にフランスにおけるデザイン運動の拠点として重要な役割を果たしていた秋季美術展、サロン・ドートンヌに、クチュリエでありながら積極的に参加をしたポワレが具体的にどのような展示を行っていたのか、その詳細を明らかにすべく、彼の参加が確認された1911年から1927年までのサロンの公式カタログや、『ラール・ヴィヴァン(L'art vivant)』、『アール・エ・デコラシオン(L'art et décoration)』、『ラムール・ド・ラール(L'amour de l'art)』等の美術雑誌に掲載されたサロン評の洗い出しをフランス国立図書館や装飾美術館等で行う。

(3) ポワレが1911年に開校した少女のためのデザイン学校「エコール・マルティエヌ」

と、その生徒たちのデザインを取り込んだ製品を制作・販売したインテリアショップ「アトリエ・マルティエヌ」に関する資料収集をフランス国立図書館と装飾美術館を中心に徹底的に行い、クチュリエという枠を乗り越え、ポワレがどのように当時のデザイン教育、デザイン運動に関与したかを検討する。

(4)ポワレと比較検討の意味で、彼と同時代のフランスで同様にジャンルの枠にとらわれず、テキスタイル制作やクチュリエとのコラボレーションを行った芸術家たち、すなわち画家のラウル・デュフィや藤田嗣治、漆作家のジャン・デュナンに関して調査・考察を行う。主な調査先はフランス国立図書館やパリの装飾美術館、リヨン織物博物館、メゾン・フジタとする。

4. 研究成果

(1)ウィーン工房とポワレの相互的な影響関係については、デザインの類似性からポワレが影響を受けたことが予想されるウィーン工房製の家具やテキスタイルを何点か見出すことができた。しかし、ポワレとウィーン工房の直接の交流を示す資料の発見には至らなかった。

(2)ポワレがサロン・ドートンヌで行った展示については、同サロンで1907年から開始された「アンサンブル」と呼ばれた展示方法に注目して考察を行った。アンサンブルとは、さまざまなジャンルの装飾品で室内を飾りつけ完成させる総合的な展示方法を指すが、ポワレがサロンに参加をした1911年、1922年、1924年、1926年、1927年の展示はいずれも衣服にとどまらず、絨毯やクッション、照明器具など幅広い装飾品を含んでおり、ポワレがアンサンブルの概念を取り込み、生活全般に及ぶデザイン活動を展開していたことが確認された。

(3)ポワレの設立したデザイン学校「エコール・マルティエヌ」に関しては、開校当初から、教師もつかず、少女たちが各自の感性を育むという自由な教育法が注目を集めていたことが、複数の記事から確認された。また、授業風景をとらえた写真も新たに発見し、これまでほとんど具体的な詳細が知られていなかったポワレのデザイン学校について、その実態が一部ではあるが明らかになった。加えてポワレが開設したインテリアショップ「アトリエ・マルティエヌ」で制作・販売されていた何点かの製品の写真、図版資料を新たに見出すことができた。

上記(1)~(3)の調査・考察によって、衣服にとどまらず生活全般に関わる全てのものを洗練された趣味で彩ろうとしたポワレの試みが、当時、ヨーロッパで多くの芸術家たちが影響を受けていたアーツ・アンド・クラ

フツ運動の思想に基づいた同時代的なものであること、しかし、パリ・オートクチュールの黄金期を支えていたポワレが、モード以外の異分野に進出したからこそ、20世紀初頭のフランスで、他国に先駆け、今日でいうところのライフスタイル・ブランドのはじまりが築かれていたことが明らかとなった。

3年間の調査・考察を通して、ファッションにとどまらない、ポワレの幅広い活動の全体像がこれまで以上に明確となり、本研究が目指していた新たなポワレ像、すなわち従来から説明されてきたファッション・デザイナーという枠に収まらない新たなポワレ像を提示することができたものと思われる。

本研究に関する成果の一部は、2016年に出版した共著『フランス・モード史への招待』（悠書館）に寄せた論文「マネキンは映す現代都市パリの生成とブランド戦略」と、同じく2016年にパナソニック汐留ミュージアムで開催された展覧会カタログ「モードとインテリアの20世紀展 ポワレからシャネル、サンローランまで」に寄せた論文「アール・デコ展におけるモードとインテリア」の中で発表した。

(4)なお、本研究はポワレ自身の活動に加え、彼の周辺で活動をしていた芸術家や、ポワレと同時期に同じようにジャンルの枠にとらわれず自由な制作活動を展開した芸術家たちについても考察を行った。

ポワレの導きによってテキスタイル制作に携わるようになった画家のラウル・デュフィに関しては、リヨン織物博物館やパリの装飾美術館で調査を行った結果、ポワレが出資をして作られたテキスタイル工房をデュフィ自らが描いたデッサンや、ポワレとデュフィのコラボレーションによって制作されたドレスをとらえた写真資料など、重要な関連資料を見出した。

今日、デュフィは1920年代を中心に現れるアール・デコ様式のテキスタイルを語る上で欠かせない重要な芸術家のひとりに数えられているが、本研究の調査により、デュフィがテキスタイル制作に取り組むその最初のきっかけをもたらしたポワレの重要性を改めて確認することができた。デュフィに関する考察の成果の一部は、2014年10月19日に愛知県美術館で「ラウル・デュフィ 絵画とモードをつないだ画家」と題し、行った講演の中で発表した。

日本人の漆作家、菅原精造から漆の技術を学んだフランス、アール・デコ期を代表する装飾芸術家ジャン・デュナンは、漆を用いた装飾品やテキスタイルを制作し、注目を集めた。本研究では、デュナンが帽子デザイナーのマダム・アニエスと1920年代半ばから10年にわたり展開したコラボレーションにつ

いて資料を新たに発掘し、これまで謎の多かった「漆布」というものが、漆作品の図案、質感、色を布地で再現したタイプと、本物の漆を使い、それを直接、布地にペイントして現代的な図柄を描き出したタイプと、2種類の布地が存在していたことをつきとめた。また、デュナンの布地やアクセサリを装着した女性イメージの分析を通して、当時のパリ・モードが、日本やアフリカなど、「他者」のイメージが幾重にも織り重なった上に成立していたことを指摘した。

デュナンに関する調査・考察の成果は、2015年に論文「ジャン・デュナンと漆のモード」にまとめ、『パリ -モダンの相克』(竹林舎)で発表した。また、論文発表後、パリのガリエラ美術館で新たに見出した資料を加え、2016年7月に日仏美術学会の例会で「漆と服飾 ジャン・デュナンとマダム・アニエスの協働」と題し、口頭発表を行った。

1920年代にパリで活躍をしていた画家の藤田嗣治がフランスの織物メーカー、ルシュール社のために手掛けていたテキスタイル・デザインに関する資料を見出した。それらの分析を通して、藤田が個々のテキスタイルに日本的な名前を付けたり、松葉模様や小紋風の花模様、青海波など、日本の伝統的な文様に基づくデザインを複数手がけていたことが判明した。

日本とフランスで制作活動を展開した藤田は、しばしば「異邦人」という言葉で形容されるが、二つの国の間で己のアイデンティティを模索し、時に揺れ動き、絵を描き続けた画家とも言えた。その藤田が、フランスのテキスタイルメーカーからの依頼でデザインを手がけた時に、日本人という己の出自を前面に出していたという事実は、この画家のこれまで語られなかった側面を知る、一つの手がかりになるものと考えられる。

藤田に関する調査・考察の成果は、2016年7月にデザイン史学研究会の研究発表会で「藤田嗣治とパリ・モード ルシュール社のためのテキスタイルデザイン」と題し、口頭発表を行った。

本研究はファッション・デザイナーでありながら、「アンサンブル」の概念に基づき、生活空間全体に及ぶデザイン活動を展開したポール・ポワレと、絵画や漆芸など、自分が本来行っていた分野に縛られず、テキスタイルやアクセサリなどの制作を行ったラウル・デュフィ、ジャン・デュナン、藤田嗣治らの活動を読み直すことで、当初、予想していた以上に20世紀初頭のパリ・モードが他分野の刺激を存分に受けながら、それまでにない大胆で新しい造形を生み出していたことを知ることとなった。我々はそこに、さまざまなジャンルの越境を可能とした20世

紀初頭のパリ・モードの重層性、多層性を見ることができると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

朝倉三枝「藤田嗣治とパリ・モード ルシュール社のためのテキスタイルデザイン」
デザイン史学研究会、第33回研究発表会、
2016年7月9日、於：神戸大学。

朝倉三枝「漆と服飾 ジャン・デュナンとマダム・アニエスの協働」
日仏美術学会第140回例会、2016年7月2日、於：京都大学。

朝倉三枝「ラウル・デュフィ 絵画とモードをつないだ画家」
愛知県美術館ラウル・デュフィ展開催記念シンポジウム招待講演、2014年10月19日、於：愛知県美術館。

[図書](計3件)

朝倉三枝、成美弘、他、「アール・デコ展におけるモードとインテリア」
『モードとアートのインテリア展 ポワレからシャネル、サンローランまで』、美術出版社、
2016年、161(141-143)。

朝倉三枝、徳井淑子、他、「マネキンに映す 現代都市パリの生成とブランド戦略」
『フランス・モード史への招待』、悠書館、
2016年、327(71-110)。

朝倉三枝、天野知香、他、「ジャン・デュナンと漆のモード」
『西洋近代の都市と芸術3 パリ -モダンの相克』、竹林舎、
2015年、470(262-284)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

朝倉 三枝 (ASAKURA, Mie)

神戸大学・大学院国際文化学研究所・准教授
研究者番号：90508714

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者
なし